

## 吉野川河口域の東環状大橋(仮称) 建設と四国横断道計画について

井口利枝子

300億の巨費を投じたのに、準備したケーブルの長さが予定より短かったり、当初の設計よりも橋脚の規模が大きくなったために干潟を浚渫するなど「想定外」のトラブルを経て、東環状大橋は開通まで後半年足らずとなりました。

来春の橋完成後は、県庁内の担当部署が廃止され、鳥類調査など2年間の事後調査を継続するものの、環境影響評価も曖昧なまま、調査や評価の体制もなくなるとのことで大変心配しています。2003年12月の着工後多くのエネルギーと4億円近い費用を投じてモニタリング調査が行われました。データ集積はあるものの、これらのデータについての評価を明らかにすることもなく吉野川河口の環境保全の要であるモニタリング調査体制も含め、すべてを曖昧なままに終了させるというのは、無責任の極みであり、残念です。私たちの責務は、このモニタリング調査結果が吉野川河口域の保全に確実に反映されるようにすることです。

環境配慮型と喧伝された東環状大橋建設においては、河口干潟環境保全に対する社会的関心が高いところから、アセス対象外の公共工事としては、異例のモニタリング調査が行われ、その内容や経費も河口干潟を調査対象とするものでは、全国的にみても大変充実したものとなりました。東環状大橋の環境アドバイザー、底生生物の専門家である奈良女子大学和田恵次教授は、環境モニタリング調査について、次のようにコメントしています。

『この調査により、吉野川河口域には貴重な生物種がこれまで以上に生息しているということが明らかになったと言えます。とりわけ干潟域のみならず、その下位の潮下帯は、これまでほとんど調査の手が入らなかっただけに、貴重な生物種が見つかったと言えます。具体的には腕足類のミドリシャミセンガイ、腹足類のツガイ、オリイレボラ、二枚貝のイセシラガイ、ツヤガラス、ヤマホトトギス、ハザクラガイ、ヒナノズキン、そしてカニ類ではウモレマメガニやフタハピンノなどの記録は、稀少種の山を表しています。ヒナノズキンは、私達がまとめた干潟RDでは絶滅したと評価していた種であり、その生貝が見つかったのは、1996年に絶滅と評価されて以

降初めてであろうと思われま。実はそれらしい種が見つかったという情報はないことはなかったのですが、正式な記録としてはまだでした。吉野川河口域の生物多様性の高さが改めて浮き彫りにされたと言えます。干潟域のみならず、その周辺の水域を含めた保全の必要性が求められます。』吉野川河口域は、まさに生物多様性の“ホットスポット”なのです。

現在、東環状大橋(河口から1.8km)に隣接して、四国横断道(高速道路)の渡河橋が計画されています。高速道路橋の建設は、明らかに二重投資です。費用便益比も低く、私たちは、予算の効率化と自然環境への負荷軽減のために、代替ルートとしての東環状線の活用を再三要望してきました。吉野川河口域は国際的に重要湿地であり、日本一の川幅と景観を誇る河口は国民の宝物であり、河口域環境の質から判断しても橋の建設よりも環境への配慮を優先すべきです。

10月22日、徳島新聞は一面トップで、『来春のとくしまマラソン 東環状大橋を走る新コース、定員1万人』と報じました。2012年4月22日に開かれる第5回とくしまマラソン記念大会は、来春開通予定の東環状大橋を走る新コースに変更され、シドニー五輪女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんもゲストラランナーとして走るとのことです。

1万人の人々が東環状大橋を走る時、吉野川が紀伊水道へと続く日本一の河口の風景に魅了されることでしょう。その海と川が出会う美しい光景がいつまでもとくしまマラソンのコースとして人々を楽しませることができるよう祈るばかりです。

(いぐち りえこ)



東環状大橋



吉野川河口域渡河橋のモニター写真